

## ナガボノシロワレモコウの生態

大泉高等学校 2年 中村 優里

### 1. はじめに

ナガボノシロワレモコウは群馬県レッドデータブック 2012 改訂版では絶滅危惧Ⅱ類に分類されている。現在の群馬県内の分布地域としては、茂林寺沼湿原、古城沼の湿原、多々良沼、板倉町蛭田沼などが挙げられている（館林市教育委員会, 1995）。しかし、特別な保護対策はされておらず、このままいくとさらなる生育数減少のおそれがある。そのため、今回はナガボノシロワレモコウの現在の生育状況についての調査を行った。

ナガボノシロワレモコウは湿地に生える多年草である。邑楽・館林市域は自然にできた池沼が県内で最も多い地域で、大小 21 個の池沼が分布し、「東毛池沼群」と呼ばれている（板倉町教育委員会, 1998）。したがって今回は、過去の文献を参考にその中から抜粋して調査し、ナガボノシロワレモコウの生育状況や適した環境、今後の保護対策について提示することを目的とする。

### 2. 調査材料と方法

#### (1) 材料

ナガボノワレモコウ（広義）

*Sanguisorba tenuifolia* Fisch. ex Link var. *tenuifolia*

群馬県レッドデータブック 2012 改訂版よりナガボノシロワレモコウ、ナガボノアカワレモコウ、ケナガボノシロワレモコウを広義に解釈する。

ナガボノワレモコウはバラ科ワレモコウ属の植物である。湿地に生える多年草で高さは約 60~100cm。互生し長い葉柄があり、秋に茎の頂が分岐して、枝先に白色の穂状花序をつけ、花穂には毛が密生する。花には花弁がない。萼は深く 4 裂し、雄しべは 4 本、黒色の葯をもつ。



図 1. ナガボノシロワレモコウ

## (2) 調査地

館林市、標高、緯度、経度

### ①多々良沼

群馬県植物誌（1968）や館林市の植物（1995）など複数の文献に分布地域として記載されていたため。

### ②茂林寺沼湿原

群馬県植物誌（1968）や館林市の植物（1995）、板倉町の自然環境'97

など複数の文献に記載されていたため。



図3. 多々良沼と茂林寺沼湿原の位置関係

## (3)調査方法

①2014年9月6日、館林市の西部に位置する多々良沼において、多々良沼公園駐車場から出発し、沼に沿って歩きながら目視での調査を行った（ルートA、B）。

②2014年8月31日と9月14日、館林市茂林寺沼湿原に設置されている木道を歩き、目視での調査を行った（ルートC、D）。



図4. 多々良沼ルート

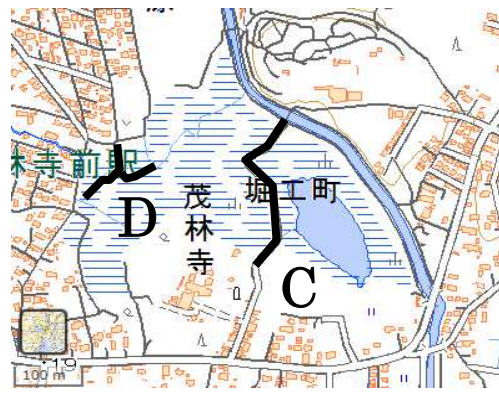


図. 茂林寺湿原ルート

## 3. 調査結果

### ①多々良沼

群馬県植物誌（1968）にてナガボノシロワレモコウが生育していると記載されていたが今回は発見できなかった。沼に沿って探索したが雑草が繁茂しており沼の近くまで行くことが困難だった。また、ルートA、B以外の場所は公園などに整備されており、芝生となっていた。アシが大量に生育していた。

### ②茂林寺沼湿原

群馬県植物誌（1968）にて茂林寺沼湿原にはナガボノアカワレモコウが生育して

いると記載されていたが今回は発見することができなかった。しかし、ナガボノシロワレモコウは木道沿いに3ヶ所（地点 a、b、c と記す）小規模だが群生しているところを発見した。すべて約5~10個体生育しており、あまり冠水している場所ではなく、地面が湿っている場所に群生していた。どれも湿原の奥側にかたよっており、住宅街の近辺では1個体も発見できなかった。ルートDの先にはさらに木道が続いていたがアシなどが道をふさいでいて進むことが不可能だった。

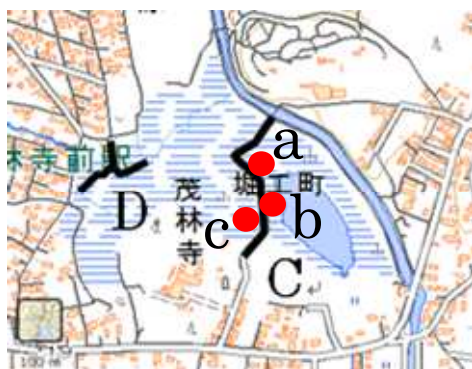


図5. 地点 a、b、c の位置

地点	個体数
a	0~5
b	5~10
c	5~10

表1. 地点 a、b、c の個体数

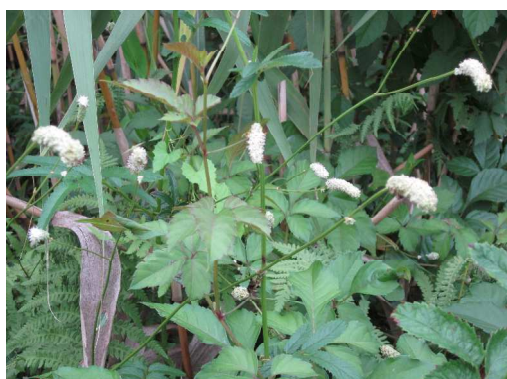


図6. 地点 c でのナガボノシロワレモコウの群生の様子

#### 4. 考察

木道沿いに群生していたのはヨシが湿原を一面覆っていて、ナガボノシロワレモコウにあまり光が届いてないためだと思われる。アシは茎をほぼ直立させ高さ2~3mにもなる大型の植物のため、それらが光を遮ってしまってナガボノシロワレモコウの生育に影響を及ぼすのではないかと考えた。また茂林寺沼湿原で住宅街の近辺では1本も発見できなかったということに関しては、土地開発や水質汚染の影響だと思われる。以前に比べ現代は人口の増加や生活水準の向上により、私たちが毎日の生活の中で出す生活廃水が増加した。そのため、住宅街の近辺では1本も発見できなかったと考える。実際に水面に油が浮遊しているところを発見した。また井戸ポンプの老朽化や地

下水・雨水の減少によって湿原全体の乾燥化、井戸水の汲み上げ量が追いついていないことなどが問題として示されている（良好な自然環境を有する地域学術調査報告書 XXVI）。



図 7 水面を油が覆っている様子

## 6. 参考文献

- 1) 館林市教育委員会文化振興課（1995）「館林市の植物」
- 2) 群馬県自然環境課（2000）「良好な自然環境を有する地域学術調査報告書 XXVI」
- 3) 戸部正久他（1968）「群馬県植物誌」
- 4) 板倉町教育委員会（2011）「利根川・渡良瀬川合流域に形成された水場景観保存計画」
- 5) 館林市市役所（2014）「館林市統計書」
- 6) 牧野富太郎他（2008）「新牧野日本植物圖鑑」
- 7) 板倉町教育委員会（1998）「板倉町の自然環境’97」
- 8) 群馬県環境森林部自然環境課（2014）「良好な自然環境を有する地域学術調査報告書 XXXX」
- 9) 館林市（2008）「館林市史特別編第 3 巻館林市の自然と生きもの」
- 10) 日本保護協会（1989）「我が国における保護上重要な植物種の現状」
- 11) 社団法人全国国土調査協会（1979）「日本の自然と土地利用Ⅲ関東」
- 12) 群馬県環境森林部自然環境課（2012）「群馬県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブック植物編 2012 年改訂版」
- 13) 国土地理院=<http://www.gsi.go.jp/>